

化学遺産の重要性にご理解を

Sakae UEMURA **植村 榮** 岡山理科大学教授 京都大学名誉教授 日本化学会化学遺産委員会委員長



はじめに

昨今、世界遺産ブームである。ご承知のとおり、人類の手がほとんど入っていない素晴らしい自然並びに人類が営々と築き上げてきた歴史的建造物やその遺跡などの重要性を喚起し、それらを人類の財産として後世に残すべく保存しようとする動きである。これに触発されたわけではないが、幸いなことに最近になって我が国の近代科学技術発展の歴史を産業遺産の形として残そうとする動きが加速され始めた感がある。イギリスで18世紀半ばにいわゆる産業革命が起こって以来このかた約250年、人類の英知と努力のもとにその幸福とより豊かな生活を目指して科学技術が発展し、様々な機械、器械、工具、装置、製品などが作られてきた。我が国では西欧にはかなり遅れをとったものの明治維新前後からこれらの科学技術の移入が始まり、紆余曲折を経ながらも先進西欧諸国に追いついたのである。技術革新や産業構造変化というものには必ずスクラップアンドビルドを伴い、古い生産装置などは取り壊され新しくしてより効率的な方法によるものにとって代わられていくのが宿命である。しかしながら、たとえ古い装置といってもそれはそれで人間の「モノづくり」としてのひとつの文化・文明なのであり、それらを科学技術遺産あるいは産業遺産として後世に残すこともまた重要なことである。

日本化学会としての取り組み

さて、化学遺産のことである。明治初期からの近代産業発展の中心の一つとなったのは化学産業による化学品製造であり、現在まで驚異的な発展を遂げてきている。それらを支えたのは基礎化学と応用化学であり、また、それを修めた多くの研究者・技術者である。これらの諸先輩の涙ぐましい努力を裏付ける史料を産業遺産の一つである化学遺産として後世に残すことは、現在並びに将来、化学の道を志す同輩・後輩の心を触発し、夢と希望を与えるものとして非常に重要で意義深いことである。いくつかの化学企業では最近になって創業120年史や100年史などの社史の刊行が行われ、また、中には立派な史料室や展示室を持っているところもある。一方、我が国の化学分野において中心的役割を果たしている日本化学会はこの問題にどのように取り組んでいるのであろうか。当会は1878年(明治11年)に創立されてから今年で130年となり、直近では2003年

(平成15年)に、天皇・皇后両陛下並びに当会特別名誉会員でもある常陸宮殿下と同妃殿下をお迎えし、創立125周年記念式典を盛大に執り行った。この記念事業を遂行する過程で、諸先達の努力を裏付ける膨大な史料が散逸し、また、失われてしまっていることが明らかとなった。少し遅きに失した感もあるが、それらの調査、収集、保管、データベース化を目指して、2004年(平成17年)3月に化学教育協議会の中に化学アーカイブズ設立準備ワーキンググループを立ち上げ、その翌年に化学アーカイブズ小委員会に格上げし、機関誌である「化学と工業」誌などで史料収集や情報提供を会員諸氏に地道に呼びかけてきた。

化学遺産委員会の誕生とその役割

勇気付けられることであるが、この小委員会が本年(平成20年)3月には化学会の研究交流部門に直属する「化学遺産委員会」に発展的に改められ、この活動がさらに活発化され、また、継続的な推進がなされることになった。現在委員12名と顧問4名で活動を行っている。すでに当会では「舎密開宗」(写真1)、「気海観瀾廣義」をはじめとする古い書物類や各国からの寄贈記念品などを約70点所有しているが、それに加えてこの事業を始めてからこのほぼ4年の間に会員諸氏から約400点の書籍、メダル、写真、色紙、書簡、退官記念集、追悼集、企業の社史などが寄せられている。その中には、第一回日本化学会賞にあたる桜井褒章メダル(写真2)、文化勲章(写真3)、池田菊苗博士によるグルタミン酸ソーダ発見に関する手書きの論文草稿(写真4)、福井謙一博士が学生に与えた色紙、東京大学理学部化学教室の古い写真集、ポーリング博士の大阪大学での講演風景の写真などが含まれている。これらの貴重な



写真1 日本化学会蔵の宇田川榕菴訳書「舎密開宗」



写真2 ご継嗣より寄贈された桜井褒章メダル：小川正孝博士に授与されたもの



写真3 朽津耕三博士を経由して寄贈された森野米三博士の文化勲章



写真4 池田菊苗博士の手書き論文草稿

史料は現在当会の倉庫と国立科学博物館の一室で厳重に保管されている。

化学遺産委員会が現在取り組んでいる主な仕事と内容は、1) 上記した各種史料の調査、収集、保管とそのデータベース化、2) 昨年（平成19年）より始めた、ご存命されている偉大な化学の先達の姿と肉声を映像と音声として残す「化学の語り部」（英語では oral history）事業、3) 本年から新たに始めた、主に化学産業において歴史的に価値のある「化学遺産」の認定と登録事業並びに化学技術史・化学産業史についての情報収集、4) 市民公開講座によって会員諸氏だけでなく一般市民の方々に化学・化学技術のルーツや歴史への理解を深めていただくための啓発活動の実施、などである。1) については会員諸氏のさらなるご協力を願うと同時に、これらの史料を今後できるだけ常に公開できるような方策を考え、また、データベース化して現在の史料収集状況を会員諸氏が簡単にインターネットで検索できるような体制を作っていく所存である。2) については1年間に少なくとも5件くらいはインタビューして残し、また、3) については認定の基準作りに力を入れ、できるだけ早く何件かを化学遺産登録できるよう積極的に取り組んでいく所存である。さらに、4) については、化学史学会と共同ですでに昨年と今年の日本化学会春季年会において史料展示とともに2回開催しており、今後も継続していく予定である。第1回目の標題は「日本の化学のルーツを探る：化学史料館作りをめざして」、第2回目は「日本の化学工業：100年の足跡」であった。ところで、現在我が国には化学関係学協会が31あり、特に化学工学会、高分子学会、日本分析化学会、日本薬学会などとはこの事業に関して緊密な連携をとっていく必要がある。一方、日本化学工業協会などにも協力を仰がねばならないなど問題は山積しているが、とにかく一歩踏み出したことが重要で意義のあることと認識している。

このような流れの中で、本年3月に国立科学博物館で開催された第1回「日本のモノづくり資料の収集と体系化」研究会は意義深いものであった。副題が「学界・産業界における歴史資料調査研究の現状と展望」とあったのはまさに

時宜を得たものであり、学会を中心とした出席8団体がそれぞれの取り組みを披露し、突っ込んだ討論が行われた。全体に共通していた事柄はいかに「モノ、場所、人、こと」を認定して後世に残すかということであり、先に新聞紙上でも見られた「機械遺産」認定事業についての具体的な取り組みを知ることもできた。残念ながら「化学遺産」は少し遅れをとっているわけである。

おわりに

日本の化学・化学技術は現在世界に冠たる地位を占めているが、それを築いた先達の努力を正当に評価しなければならず、この「化学遺産」事業には息長く取り組んでいく必要がある。アメリカ合衆国フィラデルフィアには本年創立25周年を迎えた Chemical Heritage Foundation（化学遺産財団）というアメリカ化学会とは全く別の組織があり、寄付金を中心とする莫大な資産（200億円以上）を背景に非常に積極的な活動を行っている。これには及ぶべくもないが、近い将来、たとえ小さくとも内容が充実し、誰でも自由に入出りでき、パイプの煙をふかす人はもう少ないながらも、香り高く暖かいコーヒーを飲みながら史料を心行くまで研究するもよし、化学歴史談義に花を咲かせるもよし、そのようなことのできる魅力ある化学史料館（Chemistry Museum）作りを是非実現したいものである^{1,2)}。

- 1) これらの活動を継続的に実施・推進するために、「化学遺産基金」を日本化学会内に創設し、間もなく会員諸氏並びにその周辺の方々のご協力とご支援をお願いする予定である。
- 2) 化学遺産に関する情報提供や問合せ先：日本化学会事務局（E-mail: chemarch@chemistry.or.jp Tel: 03-3292-6797 Fax: 03-3292-6318 田巻 博）

©2008 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員の執筆によるもので、文責は、基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として認め掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp